

平成 23 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

白内障手術目的で急性期病院に入院した後期高齢者の
不安の特徴と不安に関連する要因の検討
－時間・看護行為・認知機能に焦点をあてて－

学位の種類： 修士（看護学）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 10894603

氏 名： 岩崎 みのり

（指導教員名： 勝野とわ子）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

本研究は、白内障手術目的で急性期病院に入院した後期高齢者の不安の特徴、不安と時間・看護行為・認知機能との関連を明らかにすることを目的とした。

白内障手術目的で急性期病院に入院した 78～93 歳の後期高齢者 11 名を対象に、Emotional Responses in Care form(ERIC form)を用い構造化観察と、State-Trait Anxiety Inventory (STAI)を用い質問紙調査を行った。観察によって抽出された 950 の不安と STAI 得点の相関分析、および不安数の種類別、日数別、看護行為別、認知機能別の多重比較、比較分析を行った。

その結果、不安数と STAI 得点に有意な関連はみられなかった。種類別不安数は、「眉間にしわを寄せ落ち着きがない」、「顔をこわばらせる」、「目が笑わない笑顔」の 3 項目の値が高く、他の項目との間に有意な差がみられた。日別不安数は、1 日目(入院日)と 3 日目(術後 1 病日)の間に有意な差がみられた。時間別不安数は、「2 日目 8 時」と「1 日目 19 時」、「1 日目 20 時」、「3 日目 11 時」の間に有意な差がみられた。看護行為別不安数は、1 日目(入院日)の「説明・指導」、2 日目(手術日)の「点眼」「術前準備」「手術室の引継ぎ」の値が高く、他の看護行為との間に有意な差がみられた。対象者を認知機能正常群と認知機能低下群に分け 2 群で比較した結果は、3 日間の合計不安数、1 日目の「説明・指導」、2 日目の「説明・指導」、2 日目の「日常生活支援」の看護行為に有意な差がみられた。種類別不安数は、認知機能正常群が「親しい者へ視線を送る」、認知機能低下群が「こぶしを握る」「目が泳ぐ」項目について他群より高値を示し、2 群間に有意な差がみられた。

以上の結果から、白内障手術目的で急性期病院に入院した後期高齢患者の不安をアセスメントする際、目を中心とした表情の変化に注目すること、高齢患者は入院時の「説明・指導」に手術時と同様の不安を持つことを理解すること、看護師の認知機能アセスメントの重要性、および認知機能低下患者に対する「日常生活支援」をはじめとした重点的ケアの必要性が示唆された。

キーワード：不安、感情反応、認知機能、後期高齢者、急性期病院

Key Words: anxiety, emotional response, cognitive function, the older elderly, acute hospital,